きっと明日は

沖縄県立開邦中学校三年　宮城　莉子

明日。
午前十二時を過ぎたら？
一度眠って、目覚めたら？
太陽が沈んで、昇ったら？
はっきりとした境はわからない
ただ、今日の先にあって
私たちが夢や希望を思い描くところ
明日。
それは、まっさらな「未来」

私が目を閉じれば
砂をさらう波の音が聞こえる
エイサーの力強い太鼓の音が響く
友の「おはよう」という声が耳に届く
きっと明日は
もっと輝いた音が聞こえる

僕が目を閉じれば
空襲を知らせるサイレンの音が鳴り響く
泣き叫ぶ赤子の声が耳をつんざく
家が　森が　燃える音が聞こえる
きっと明日も
穏やかな静寂はやってこない

私が上を見上げれば
そこには青い空がある
紅い花を咲かすデイゴがある
オオゴマダラが風に乗る
きっと明日は
もっと澄んだ空が見える

僕が上を見上げれば
そこには黒煙が立ちこめている
真っ黒な戦闘機がある
雨のようにふる銃弾がある
きっと明日も
飛んで行きたくなるような空は見えない

私の手の中には　鉛筆がある
夢に向かって勉強する
未来のために日記を記す
大切な人に想いを綴る
きっと明日は
もっと豊かな言葉を紡ぐ

僕の手の中には　銃がある
勝つために人を殺す
国のために人を殺す
生きるために人を殺す
きっと明日も
数えきれないほどの命を奪う

私が「死にたい」と言えば
友人は「何かあったの？」と心配する
先生は「話してごらん」と耳を傾ける
家族は「あなたが大好きよ」と涙する
いろんな人に支えられて
きっと明日も
私は心臓の鼓動を感じる

僕が「生きたい」と言っても
僕の声はどこにも届かない
世界のどこにも、残らない
ただ反響して消えていく
どれだけ「生きたい」と願っても
どれだけ「生きたい」と叫んでも
きっと明日こそ
僕の命の灯火は消える

七十七年前、人々は「明日」を奪われた
美味しいご飯を食べられる明日
家族と笑いあえる明日
誰も攻撃せずにすむ明日

そんなものは
どこにも見つからなかった
とうてい想像できなかった

ただあったのは、
死体を横目に必死に逃げる「今」だけ

でも
その人々が必死に生きて
明日はきっと、明日はきっとと
一日を、一ヶ月を、一年を
繋いでくれたから
戦争という昏い事実を風化させるなと
言葉を、話を、映像を
紡いでくれたから
私たちは今
この沖縄の地を踏んでいる
一人一人の明日を思い描いている

過去は全て　誰かの明日だった
私たちが生きるこの世界は
たくさんの人が「明日」に託した想いが
何層にも積み重なってできている

だから繋ごう　私たちも
何が起こるかはわからない
今日とは全く違うかもしれない
それでも
全ての人が胸を張って生きられる
「明日」を

未来に繋ごう　私たちで
かつて託された想いを
誰かの叶わなかった夢を
人々が作ろうとしてきた平和を
私たちが知っている平和を

きっと
私たちがつくる「明日」は
今日よりも平和で
今日よりもきらめいている